

『原爆が遺した子ら』をめぐるアフター・トーク

平尾直政 東琢磨
大牟田聡 山本昭宏

山本昭宏（以下、山本） 『原爆が遺した子ら』を鑑賞しました。ここからは、アフタートークという形でお話ししたいところだと思います。私から簡単に三人をご紹介します。

まず一人は、先ほど鑑賞しました『原爆が遺した子ら』のディレクター、平尾直政さんです。RCC中国放送の報道制作局にお勤めです。一九九〇年から原爆小頭症患者の取材を続けてこられました。現在はきのこ会の事務局長を担当しておられます。今日の企画は平尾さんのご厚意によって実現いたしました。平尾さん、ありがとうございます。まず平尾さんからお話しください。後、二人目として東琢磨さんにお話をいただきます。

東さんについては、改めて紹介するまでもないかもしれませんが、一点だけ情報提供をしておく、川本隆史さんと仙波希望さんと一緒に編集された『忘却の記憶』を上梓されました。その他にも『ヒロシマ・ノワール』や『ヒロシマ独立論』など、広島に関する文筆活動をずっと続けてこられました。また、今日の企画

との関わりで言うと、長年、ヒロシマ平和映画祭の運営にあたってこられたという関係もあり、企画の際からいろいろと相談に乗ってもらいました。

三人目としてお話をいただくのは、大牟田聡さんです。ドキュメンタリーのなかには、お父さんの大牟田稔さんが出て参りましたね。大牟田さんはこの研究会によくお越しいただいていておりますので、みなさんご存じでしょうが、現在、毎日放送にお勤めです。これも情報提供ですけれども、演劇の『河』の論集がこの前出しましたね（土屋時子・八木良広編『ヒロシマの河 劇作家・土屋清の青春群像劇』藤原書店、二〇一九年）。そこにも大牟田さんは、ご寄稿なさっていて、講演活動や執筆活動もされておられます。つまり、現役のジャーナリストの視点と、大牟田稔の次男からの視点双方から、コメントいただけるのではないかと思っています。この三人にお話しただいた後、全体にひらいていこうと思います。それではさっそくですが、平尾さんよろしくお願いたします。



左から、東琢磨氏、大牟田聡氏、平尾直政氏

平尾直政（以下、平尾） 中国放送の平尾と申します。先ほどは番組を見ていただきましてありがとうございます。今回のこの番組のことについてなんですが、原爆小頭症について作ったのはこれが初めてではありません。先ほどもご紹介いただいたとおり、一九九〇年から取材を始めました。タイミングとしては、番組の中でいうと、ちょうど映像がカラーに切り替わったぐらい。あの映像以降は全部私の取材したものだと考えていただければと思います。

いちばん最初に取材した時は、やはり、そのまますぐに取材ができたわけではありません。大牟田聡さんのところに行つて、「こういう取材をしたいのですが」「こういうことを考えているのですが」などと伝えたりしました。また、「原爆小頭症とは」ということを教えていただいて、それから取材を始めたという記憶があります。そういう意味では、原爆小頭症というのは取材が非常に難しいものだということの認識がありました。そういう中で、取材を始めましたのです。

当時はまだ小草信子さん、番組に出ていた、右脚に障害がある女性、あの方を追いかけるドキュメンタリーの撮影をずっとしていました。そういう撮影を続けていく中で、原爆小頭症全体について関心が湧き、取材をしていくうちにだんだんそのまま記録、撮影して放送するだけではないのか、というように自分に問いかけるようになりました。

取材をしながら、支えながらという、取材者としてはすごいジレンマを抱えるような、そんな取材を続けていきました。悩みながら悩みながら取材をして、映像を積み重ねて番組を作りました。

まだ悩みながら、一生懸命支えながら、というように今に至っています。実は私は、ずっと報道に関わっていたわけではありません。二〇〇六年に一度報道の現場から離れました。人事や経営企画といった、まったく関係ない部署に移っていました。その間も、デジカメで記録は続けていました。今回はそういう映像がたくさん入っています。そういう意味では、秋信利彦さんは二〇一〇年に亡くなられたのに、なんで二〇一七年に放送されたのかというと、その間私は人事にいたから、という理由がいちばん大きいかもありません。どうしても番組作りがしたいという思いもあり、無理を言って現場に戻してもらいました。

そして、番組を作るときに、何を作ろう、ということを考えました。すぐにこの番組を作ろうと思ったわけではありません。被爆者がすべて亡くなった後、取材者として、広島ジャーナリストとして「何を伝えることができるんだろう」というところから考え始めました。

直接体験を伝えられる人がいなくなりつつある、そういう状況の中で、何が伝えられるのだろうと。それってやはり、先輩たちが残っていた記録であったり、文章であったり、映像であったり、音声であったり。そういうものから紐解いていって、何かを伝えるということが続けていくのが広島の放送マンの役割なんじゃないかと思っただけです。

そこで、では何を伝えようか、と。自分としては、ライフワークとして原爆小頭症のことを伝えようと思っていましたので、原爆小頭症で何か伝えられるかなと思いました。通常であれば、「原爆小頭症の方がたのこれまで」というような番組の作り方が多い

と思います。これまでもそんな作り方で何本も番組を作ってきました。

そこで改めて、伝える側のことというのは、実は形になっていないと思っただけです。私のような、後から入ってきた者でさえすごく悩み苦しみ、記録をし続けたわけですから、いちばん最初に始めた事務局の秋信さん、大牟田さん、そして作家の文沢隆一さんの三名、それはやはりすごくいろんなジレンマや悩みを抱えて日々、取り組んでいたのではないかと思います。そして、これまで過去に記録していた映像を全部ひっくり返して、見てみました。また、秋信さんがご存命の時に、一応記録ということでお話を聞いたインタビューの音声などを使わせていた。たいたりもしました。その中で、では秋信さんの生き様について番組を作ってみようと思いました。

ただ、そこに至るまではすごく悩みました。私はRCCの社員で、秋信さんはRCCの大先輩です。関わる人はみんな内輪です。出てくるジャーナリストもみんな内輪です。内輪のことを描くというのは、身びいきのような薄っぺらい番組になってしまうかねない。本当に、秋信さんが伝えようと思っただけのことを伝えることはできるのだろうか、と悩んだのです。悩んだ上で、でもやろうと思いました。それが成功しているかどうかということは、まだ私の中でも自信がありません。ただ、そういう意味でこの番組を作っているかと思っただけです。きっかけとしてはそういう感じです。

実際に番組を作っていく中で、秋信さんの思いみたいなものを理解できたような気がします。それまであまり秋信さんのことを知らなかったのかも思ったりもしました。というのも、秋信さ

んは、私に、実際には何も語ってくれませんでした。秋信さんはキーマンなので、元気な時にインタビューをして、『きのこ会』のことを聞かせてください」と頼んだところ、「わしゃあ、いい」と行つて大牟田穂さんを紹介されました。そういうように他のキーマンを紹介することはありましたが、自分が表に出ることは一切ありませんでした。秋信さんは映像にあるとおり、体を壊して、酸素ボンベをつけて呼吸するようになった晩年になつて初めて、ビデオカメラの前で話をしてくれるようになりました。それはやっぱり、伝えなくちゃ、記録しておかなくっちゃという思いを強く持たれたせいなのかと思います。

そしてこの番組のタイトル、『原爆が遺した子ら』、これは秋信さん、大牟田さん、文沢さんの三名の事務局の方が「きのこ会」としてまとめた本の名前です。いろいろ考えたんですが、やはり事務局の方々がまとめられたこの本の名前こそが、この番組のタイトルにふさわしいのではないかと思います。文沢さんお一人がご存命なので、彼のところにお願ひに行き、「こういう番組を作りたいので、つきましてはこのタイトルを使わせてください」とお願ひをし、承諾を得ました。今となつては、この番組のタイトルはこれしかないかと、私は思つております。

「きのこ会」の現状については、番組の中でそこまで深くは扱つていません。原爆小頭症の本人というよりは、その家族たちが差別と偏見に苦しみ続けており、それは今でも続いています。実際に被爆をした後に生まれて、被爆をしたにもかかわらず、被爆二世と誤解をされ、「あそこの家は被爆をしたためにこういう障害のある子どもが生まれた。だから結婚の際には気をつけろ。就

職の際にも気をつけろ」。そんなことを実際に言われ続けてきました。結婚を諦めた方や、就職がうまくいかなかった方もいらつしゃいます。

「きのこ会」の中にも、「前に出ていって、この問題を伝えなくてはいけないんだ」という方もいらつしゃいました。例えば、山口放送の磯野恭子さんというディレクターが作られた「聞こえる母さんの声が：～原爆の子・百合子～」という、原爆小頭症の島中百合子さんをお父さんで抜つたドキュメンタリーがあります。この島中百合子さんのお父さんの国三さんという方は「とにかく伝えなくちゃダメだ」と言われて、どんどんマスコミに出ていかれた方です。他の方々、例えば二代目会長として出てこられた女性の長岡千鶴野さんという方をはじめとして、ほとんどの家族というのは、偏見にさらされることによつて表には出たくないし、マスコミの目にさらされるのは勘弁してほしいという方々がほとんどです。そういう家族の思いをしっかりと受け止めて、事務局の方々は取材に当たらない。事務局をとおして、そして事務局の方が本人に当たつて、取材を受けてもいいといったケースのみ取材を行う、そんな対応がとられた。

完全にシャットアウトというのではなく、しっかりと勉強して、しっかりと伝えたい方。あるいは、ちよつと書いてすぐに逃げていくのではなく、腰を据えてしっかりと伝えていこうという思いを持たれた方には引き継ぐということを、事務局はやつていました。それは、ご家族の思いを受けてそうしていたのです。「きのこ会」全体としては、基本的に、「取材はノーです」という対応を、ご家族の思いとしてされていきました。そうはいいながら、親

御さんたちが高齢になり動かなくなってきた。そういう中で、「このままではもうどうしようもならないので『きのこ会』内部だけではなく、外部の人たちにも助けてもらおう」という声が、一九九一年に会の中で出ました。会員である親同士は激しく議論をしていました。そのタイミングから、テレビカメラや新聞社の取材が内部に入れるようになったのです。

実は、顔にモザイクがかかっていたのは、初代会長である畠中国三さんと、娘の百合子さんです。「どんどんマスコミに出なくては」と言っていた方々が、お母さんが亡くなり、お父さんが亡くなり、ご本人だけになって、今は百合子さんの妹さんがケアをされています。ごきょうだいとしては、マスコミが取材にこれらにすることにごくつらい思いをずっとされていて、妹の思いとしては、「資料館のように、思いを持って、来て見る方については、見てもらっても構わないが、テレビや新聞のように、誰の目に触れるか分からないようなところで自分たちの姿を見られるのは絶対に嫌だ」とのことだったのです。なので、今回の番組につきましては、これまでほとんど原爆小頭症の象徴として扱われていた畠中さんの映像にはすべてぼかしをかけました。

そういう意味では、年を追うごとに状況が変わってきているとは思いますが。秋信さんが続けてこられていたような、他のメディアの方への橋渡し役を私が今、行っています。基本的な姿勢として、ご本人の思いを最優先します。取材を受けるという方は取り次いだりするのですが、拒まれる方については、ちゃんと止めています。とても難しいことだと感じています。

でも今いちばん大切なのは、記録することなんだと思います。

今、ご存命のご家族の方も、いつかお亡くなりになってしまったり、小頭症の本人たちも亡くなってしまったり。多くの小頭症の被爆者たちは普通に歩けない人がほとんどで、車いすの状態です。ごんごん、普通の七三歳よりも年齢経過を早く感じます。本当に体調の悪い方がほとんどです。原爆小頭症の方は、今、全国で一八名が認定されていますが、どこまでご存命になるか分かりません。だからこそ、しっかりと記録にとどめておかないと、思っています。どこかのタイミングで発表できるかもしれないし、研究者の方々によって発掘していただいてまとめられることもあるかもしれません。とにかく今はしっかりと記録していくことが大切です。

山本 ありがとうございます。続いて東さん、どうぞよろしくお願ひいたします。

東琢磨（以下、東） 東です。いくつか論点を出せばと思います。まず個人的な話をさせてください。僕は二〇〇五年に広島に帰ってきました。後に仲間なり友人なりになっていく人たちがその年からヒロシマ平和映画祭というものを立ち上げるということで、そちらに参加しました。第一回ヒロシマ平和映画祭の作品選定の段階で、いろんなものを観ました。

テレビドキュメンタリーというのはだいたい夜中に放映されますが、『絆』という作品をたまたま見ました。それは、平尾さんの作品で、原爆小頭症の方を扱ったドキュメンタリーでした。私の心は激しくもつていかれました。

僕自身の今までの仕事で関心を持ってきたものとのつながりがありました。僕はどちらかというと音楽を中心にやってきました、

周縁部の者であるとかインディーズなもの、マイナーなものを扱ってきました。テレビドキュメンタリーというフォーマットは見なくはないけれども、ちよつと距離感も感じていました。広島や反核、被爆者を扱ったドキュメンタリーは、ある程度型にはまったものというイメージがありました。『絆』という作品は違いました。実は僕はこちらの作品の上映を希望していました。

そんなこともあって平尾さんと知り合い、作品の経緯などを知りました。支援者である人が放送局に勤めていて、その方が撮った作品だと。結果的に作品になっていき、そしてテレビで放映されることになったという経緯らしいのです。原爆小頭症という言葉を忘れていたなと思つたんです。僕は小学生の時に家の近所に、今から言えば、小頭症の方がおられました。当時は分かつていませんでした。おじさんの手前ぐらいの人が小学生である僕らのところへやって来て、「一〇〇円ちょうだい」と言つたりする方でした。今思えば、その方は小頭症だつたんだなと思つたんです。

二〇〇五年に広島に帰つてきた時に自分の今までの仕事とは違う、広島について本を出すということは決めていたのですが、それもあって、「知らなかったな、忘れていたな」といういろんな思いが生まれました。広島に取り組んでいく上で、この小頭症の問題とか、平尾さんのような地元テレビの関係者たちとの仕事もあると気づきました。すぐに積極的に加担していくことにならないうちも、常に心の片隅に置く、新たな原点になっていくのではないかという予感がしました。

ちよつど同じ頃、ステイヴン・オカザキ監督が『マッシュルーム・クラブ』という短編映画を作りました。「マッシュルーム

・クラブ」というのは、「きのこ会」をそのまま英語にしたものです。この映画には「きのこ会」の小頭症の方たちも出ます。ですが監督は、英語にすることで、広島後の地球で暮らす人たちとある種の共同体みたいな形で「マッシュルーム・クラブ」と英語化したのではないかなというメッセージも受け取りました。そんなこともあって、いろいろ考えていました。先ほど申し上げましたが、テレビそのものというフレームと、あるいはその中でテレビドキュメンタリーというフレーム。またさらにはテレビドキュメンタリーという、若干いろんな人の中にある固定観念の中にあるもの。そして、平尾さんやローカルの方たちがやっておられる仕事。それらは何層にも重なつていきます。

また、今日の作品もそうなのですが、激しくエモーショナルに反応してしまうところがあります。平尾さんの言葉でも「記録」という言葉が出てきますが、ヒロシマ平和映画祭を続けていく上でも、記録の重要性というものがすごく出てきました。ところが記録そのものと記録が作品になっていく過程、あるいはドキュメンタリーというフレームになっていく過程には、少し距離があるのを感じています。その辺のことを話せたらと思います。

また、奇しくも本日のご報告が、原民喜という素晴らしい作家の作品についてでした。原民喜はおそらく、原爆体験がなくともすばらしい作家であつただろうと考えます。どういった作家になつていたかは分かりません。それとは対照的に、平尾さんは支援者として、記録者として、テレビドキュメンタリーの作家として付き合つてこられている原爆小頭症の方がたというのは、限りなく、語ることでできない人たちですよ。ただどその人たち

を、あるいはその周りの人たちを記録することによって生まれてくるものがある。そしてそれをテレビドキュメンタリーというフレームで撮っているにもかかわらず、僕はそこに激しく詩、ポエジーを感じるんです。その部分を原爆文学研究会に集まっておられる方々にぜひ見ていただきたいです。そしてそこからどういうものが引き出されてくるのかということに興味を持っています。

ここからは少し飛躍して、今日言っておきたいことを言わせてください。アニメの問題を非常に考えております。具体的な作品名は挙げませんが、風景や事物をものすごくリアルに描くことが流行っています。先日、大きな事件に見舞われたアニメスタジオも、アニメであるにも関わらずロケ地巡りをするという。それが村おこしにつながっていくという一大ブームメントを引き起こしています。

ところが不思議なことに、やはりアニメというのは顔が描けないのではないかと思います。例えばあの、広島を描いた作品でも、あの顔でいいのか、とも思います。例えば『ペリリユー』という漫画があつて、それもむしろ、全然違う顔なんです。その顔でなければ、戦争にまつたく触れてこなかった新しい世代は入り込めないのかなということを含めて、今日は改めて、「人の顔を見る」ということを考えたいです。

やはりドキュメンタリーの最後の魅力の一つはその人の顔を見るところだと思つています。それが政治家を扱うドキュメンタリーでも、いろんな裁判や証言を扱うドキュメンタリーでも、言葉だけではなく、表情を見られるという記録の重要性。それを

今日はすごく感じさせられました。また、少し前に相模原で障害者の方々が一九人殺されるという衝撃的な事件がありました。その被害者たちの顔も名前も公開されない。そのことは小頭症の人たちとその家族を取り巻く状況と非常に似ています。施設にいる人やその家族に対する差別や偏見があるし、であるがゆえに、顔も名前も明かせられないという状況が出てきます。

そういう意味で、この小頭症を取り巻く問題というのは、原爆や核の問題であるだけではありません。顔や名前、そして、語れるのか語れないのかという極限の問いであります。また、先ほど出てきた原民喜に関する発表の中で出てきた「うつくしいもの」という意味では、最も厳しいところに最も美しい関係性が生まれているという意味でも、すごく人の心を揺り動かすものでもあるんだなと考えてみたりしています。

もう一つは、今、広島にいて、先ほど『伝える側』のことを伝えていない」という平尾さんがおっしゃいましたけれども、今も広島は、どうしても被爆者に語らせすぎています。あるいは被爆者に語らせることによって、自分たちの思想的な立場を不明確にし続けているということが大きくあると思います。先日、核不拡散条約の批准云々の話で、広島市の市長が「被爆者の気持ちとしては」という言い方をしました。被爆者の気持ちでなくても、核兵器をなくしてほしいと思っている人は、広島に来なくても、広島市の被爆者の親族を持っていなくても、日本人でなくても世界中にいるわけです。被爆者の気持ちは、関係ないわけではないですが、それだけが絶対条件ではないはずなのに、そういう発言がまかり通つてしまつています。

一方で反核や平和を言う側も、被爆者という当事者に過剰に重荷を背負わせて、自分たちが矢面に立つことを避けているのではないかという気もしています。そろそろ本当に広島も変わらないといけないという意味で、平尾さんがおっしゃった秋信さんという「伝える側」のことを記録し直し、もう一度いろんな意味でのアーカイブを整理していくというのも一つのきっかけとなればいいかなと思います。

テレビという、誰でも親しめるはずなのに、その後に見られないという状況を何とかしたいなというのは、制度的な問題として変わっていけばなど。平尾さんもその辺りも考えながらいろいろ作品を作っておられるそうなので、後でそういつた話も出てくるのではないかと思っています。議論のきっかけになればいいなということをつくつてみました。以上です。

山本 東さんありがとうございます。一点だけ情報提供をさせていただきます。さつき東さんがおっしゃられていたのは二〇〇五年製作の『絆』という作品です。確かにこれも重要な作品で、今回の上映候補として企画段階で挙がっていたものです。それでは次は大牟田聡さん、よろしくお願いいたします。

大牟田聡（以下、大牟田） 非常に難しい三番手だなと思いつながらお話をいろいろ聞いていたのですけども、簡単に言います。まず私自身の立場を申し上げます。

今回は広島大学総合科学部の学生さんも来られているというところですが、三〇数年前に私も総合科学部を卒業しました。当時は父親が中国新聞の論説主幹になる前でした。地元で就職すると山田や山下という名前ならいいのですが、「大牟田」という名前だ

と、父親が知られているのでずっとこれを引きずってしまふ、これはいけないということで、一念発起したということでもないですが、広島を離れようと思い、大阪の放送局に就職しました。

その時にもう一つ感じていたことがあります。大学の時にはサイクリング部に入って全国をまわっていました。そうすると、八月六日を各地で迎えることになりました。その時に「この温度差は何だ」と感じました。広島にいる限りは感じることはない、存在感のない八月に非常に衝撃を受けました。広島を語るのは、広島を出ないとダメだ、と若き日の私は思ってしまったんです。

大阪へ行くと、報道部へ配属されました。原爆のことを特集二ユースでやりたいというのと、「それは広島の問題だろう」という言葉がデスクから返ってきました。何十年もやってきたペテランのデスクからそう返されたわけです。それを何回も経験しました。「お前の趣味でやるな」みたいなことです。広島から一步出た場合の、そのようなジャーナリズムの現状は確かにあるということを思います。

父親がいる限りにおいては広島に戻ってくるつもりもそんなになかったです。父親の定年直前に平岡敬さんが市長になりました。市長と父親は、新聞社の先輩と後輩の関係でした。そして父は、市長に請われて広島市の平和文化センターの理事長になり、平岡敬さんと一緒に平和行政の一翼をになうこととなりました。父がそのような重責を担い、私は私で忙しかつたのもあり、なかなか広島に帰ることがありませんでした。しかし父親は二〇〇一年に突然ガンを発症し、半年後に亡くなってしまいました。

「きのこ会」というのは、私が広島にいた頃、家の中で何度も

飛び交う言葉でした。秋信さんや、「きのこ会」の元事務局の重田雅彦さんは、私の家にしょっちゅう入り浸っていて、何をしにきているのかよく分からないおじさんたちという印象でした。また、時々家に電話をかけてきて、長時間しゃべり続けるおばさんがいました。それが、先ほど出てきた長岡千鶴野さんです。私は当時中学生だったんですが、長岡さんは一切気にせずずっと話しかけていて、それを私は一生懸命メモしていました。ですので、「きのこ会」というのがどういうものかということは漠然とは知っていましたが、父親がやっていることだということで、拒否とまでは言いませんが、特段手伝うこともなく就職してしまいました。

それが変わったのが、二〇〇一年に父が亡くなり、二〇〇六年に還暦を祝う会の時に秋信さんから連絡をいただいた時です。司会をやってくれと言われたんです。「なぜ僕が」と思ったのですが、たぶん秋信さんもその時は自身の体調があまりよくなく、僕を巻き込んでしまいたいという思いがあったんだろうと思います。父親と秋信さんはそのような関係でした。

また父親は偶然、先ほど出ました『この世界の片隅で』という本の中で、東京支社にいて沖繩の被爆者について取材していた、ということがあります。これはこれとして、当時としてはわりと画期的なことでした。当時の沖繩はまだアメリカの占領下にありましたが、被爆者の取材のために沖繩へ行くということ、ビザがおりなかったのです。そこで、当時広島カープに入団が決まっていた沖繩の安仁屋宗八投手を取材するという名目でビザをとったようです。もちろん安仁屋選手も取材はしました。その上で、沖

繩の被爆者に取材をし、それを帰ってきてから記事にしたということ。その結果、初めて日本政府も米政府をつうじて、本格的な被爆者に対する医療提供を始めるという動きに展開しました。その同じ本に、「JIN UTERO」、先ほどの秋信さんが小頭症のことを書いたんです。

しばらく東京にいたんですが、今度は秋信さんが一九七〇年代に東京支社に転動になりました。うちの父は一九六〇年代後半に広島に戻ってきましたので、立場が逆転しました。東京でのいろんな活動は秋信さんがやって、広島で「きのこ会」の面倒をみるのはうちの父ということになりました。そんな風になうまくまわっていきました。

先ほどの東さんの話の中で、「非常にポエティックなものを感じた」ということでした。いいドキュメンタリーはポエティックなんです。記録をし続けなければいけないということはジャーナリストの私なり平尾さんには共通しているところだと思います。

記録というのは、素材なんです、結局は。

それをどういふふう料理し、表現して伝えるかということこそが、ディレクターやプロデューサーの役割なんです。ただ、素材がないと何もできない。素材は撮っておかないと、後から撮ろうと思っても撮れない。今の『原爆が遺した子ら』をご覧になったら、今では亡くなった方がいっぱい出ています。これは撮っていないかったら残っていないのです。写真があるかどうか、というぐらいだったと思います。東さんがおっしゃったような表情だとかそういうものが残らない。そこはぜひぶん違おうんだろうなと思います。

テレビドキュメンタリーがおかれている状況というのは必ずしも非常にいいわけではありません。各局とも、お金はかかるし数字はとれないしで、なくす方向にどんどんいつています。だから、最近ではテレビ局がドキュメンタリーを映画にするということが増えています。それはなんとか見る人を拡大したいという思いと、放送しても見てほしい人に見てもらえていない、という思いがあるからです。

山本 放送局のドキュメンタリーが映画化するというのは、どういうことですか？

大牟田 最近でいうと東海テレビがやっている『人生フルーツ』とかです。非常に話題になりました。東海テレビは非常に力を入れて、『ヤクザと憲法』などのいろんなドキュメンタリーを映画化しています。そういったところですよ。

山本 大牟田さん、ありがとうございます。今、三名から情報提供や論点の提出などいろいろございました。今から、いつもどおり総合討論に入つていこうと思います。どういう視点からでも感想、コメント、事実確認、何でも結構かと思います。

坂口博（以下、坂口） 坂口です。本当にいい記録作品だと思えます。作者を目の前にして言うのは何ですが、面白いと思つたのは、時系列がバラバラにされていく、これは非常に作者が構成しているなど。それに関心を持ちました。だから作品分析を行うならば、時系列で直して、作者がどういう考えでこの作品を作つたのかということ进行分析したい。そういう作品だと思つて見えました。また、モノクロとカラーという映像の違いがあるので、時系列がきちんと分かれてこちらに伝わってくる、これは非常にある意味

では幸いしたんではないかと思いました。

そんな感想の後に、あえて細かいところとお聞きします。アンサーの松永さんの方法と、秋信さんの方法、この違いに非常に関心を持ちました。作品の中では描かれませんが、もし話せることがあつたら、その辺を聞きたいなと思いました。また、最後の質問で、二人の間の確執とまではいかなかったも、方法の違いから見えてくるものはないのかなと思いました。以上です。

山本 では平尾さんお願いします。

平尾 ありがとうございます。時系列がバラバラだということについてですが、これはドキュメンタリーの制作手法の話になると思います。先ほど記録と番組製作がありましたけれども、記録というのは足し算だと思つたのです。そして、客観的なものです。主観を入れずに客観的にどんどんどん残していく。整えながら残していく。それが記録です。ただ、今度は、ドキュメンタリーの番組は引き算です。その素材をどうそぎ落としていくのか。いかに落とすしていくのか。一時間の番組であつたとしても、九〇分の番組であつたとしても、二時間の番組であつたとしても、五分の企画であつたとしても、テーマは一つです。あれもこれもじゃなくつて、それをどういうふうに取れんさせていくのか。

報道は客観的にということは、識者の方々によく言われますが、そんなの僕は嘘つばちだと思えます。ドキュメンタリーの作品はあくまでも客観的なものではなく主観的なものです。ドキュメンタリー製作者の思いのほどばしりが番組であると僕は思つています。そのほどばしつたものをどう構成していくのかということで作っていくのが番組です。

そこで、時系列に並べていくというの、作り方の一つです。時系列ではなく、人の言葉を受ける形でつないでいくのであったり、テーマでまとめていくとか。あるところからいったん戻して、「そもそもこうだったね」というのを思い出してもらおうとか。頭の部分に印象的な言葉を短くつけていって、まずこれはこういう番組なんだなというのを何となく、よく分からないかもしれないけどもちよつと心に引っかけてもらおう、そして本題が始まるという形など。いろいろな作り方があり、それは番組バラバラです。今回については、このような作り方をしたということです。論文みたいに系統立てていったというよりは、見せたい私の思いで構成していったと理解していた、できればと思います。

松永さんと秋信さんの関係ですが、非常に良好です。一年しか入社が違っていない年がほぼ同じです。そんな感じですがごく仲良しでした。何が違うのかというと、秋信さんは支援する側。そして松永さんは番組を作る側、取材する側。その違いだと思えます。もちろん秋信さんは現場と小頭症については支援する側でしたけれども、他の番組については、バンバンいろんな番組をコーナーを分けて作ってらっしゃいました。そういう意味では同じ番組作りをしている、シンパシーを持ち合う関係という感じだと思えます。ちなみに秋信さんがプロデューサー、松永さんがディレクターという番組も何本もあります。原爆小頭症以外にも。そんな感じですが、支援者と製作者の違い、それだけだと思えます。ただどそういう意味では、秋信さんも原爆小頭症以外のものではないです。すごいガラガラしたものは持っていったというふうに思います。以上です。

山本 ドキュメンタリーの作り方については、大牟田さん、何か補足ございますか。時系列がバラバラだったり、という話がありました。

大牟田 まあ、そういうものですね。セオリーはまったくなくて。それはセンスといいますが、同じ素材を使っても作り手によって出来のいいものであれば何じゃこりやというものができるともよくあります。その中で大事なものは「何を伝えたいのか」というところです。私はそれを重視します。中には、「何かを伝えたいなんて思うな」というプロデューサーもいたりもします。これは人それぞれです。そこが多様性かなと思っています。

山本 ありがとうございます。では高野さん、ディレクターのご経験があると思うので、そういった観点から。

高野吾朗（以下、高野） ここにいらつしやる何人かの方は僕のことをご存じなんです。僕はNHKで八年間番組製作ディレクターをやっているドキュメンタリーを作ったりしていました。まさに今、平尾さんがおっしゃった、引き算というものに耐えられなくなりまして、自分勝手に取材対象の人生をどんどん収められていくというやり方そのものにとても耐えられなくなつて、全部やめてしまいました。

ですから平尾さんのようなおっしゃり方をなさる方からすると、僕は本当に臆病者の極みのようなディレクターでしたが、全然悔いもっておりません。そのような人間から、特に平尾さんに質問をさせていたたいです。秋信さんという方が「取材はするけれども記事や番組にはしない」というやり方でのような信頼関係を築いていったというのは、非常に素晴らしいです。

また、そういう秋信さんにも目を向けた、取材対象、及び取材する側の両方の人生を背負うような形の番組作りをなさったのは大成功で、すばらしい番組づくりをなさっているなど。取材者の裏側のほうまで目配りをしてカメラをまわすというのは、なかなかないドキュメンタリーの手法だと思って僕は非常に感心してみていました。

しかし、こういう秋信さんのようなまれな個性と、まれな人間的な強さ、そして当時それを許すような日本の現状があったがゆえの奇跡的な出来事であって、これは果たして今後もずっと繰り返され得るようなことなのかというのは、非常に僕は疑わしいなと思います。たまたま秋信さんだけができたことであって、もう二度と誰にもできないことのようにも感じるわけです。あんなまねはできませんという後輩の声も出しましたが、今だと、小頭症のように複雑かつ非常に深刻な問題が今現状としてこの二〇一九年にあって、それを取材しようとする時に、「よし、おれは取材するけど、信頼関係のためには記事にもしない。番組にもしない」といえるジャーナリストが今あり得るのか。また、そんなことを許すマスコミのシステムが今あるのか。そして番組にしたとしても、先ほど東さんがおっしゃっていましたが、被爆者にばかり語らせて取材者は裏側にまわって、お茶を濁すだけ。そんなやり口の大量生産でなかなか秋信さんのようなことはできないのではないかと。そのようなことを特に平尾さんの後の世代、若い世代の方々を見ていて、本当にこいつらから第二の秋信が生まれるのか、ということはどう思われるのか。俺一人で終わっちゃって、次には俺みたいなヤツさえも出てこないのではないかという危機感

を、平尾さんは持つておられないのか、その辺を聞きたいのが一つです。

実はあともう二つあります。一つは、秋信さんという方は自分の禁を破って『面会室』というドキュメンタリーをお作りになったそうですが、その時にご自身には罪悪感とか、作ってしまった感覚、やらなきゃよかったのにあんなものを作ってしまったというような気持ちをお持ちになったりしたことがなかったのかどうかということ。そして、こちらも重要だと思うのですが、二点目として、胎内被爆をした人たちの中には、小頭症もならなかった人たちも絶対にはたはずだと思っんです。小頭症は一部、だったはず。小頭症という名前がついて、「きのこ会」という会ができれば、取材しやすいです。ラベルがついているから。そうじゃない、ポーターラインの方々。あるいは小頭症にはならなかった胎内被爆の方々は見捨ててよかったのか。排除してよかったのかということもちょっと聞きたいです。

平尾 まず、秋信さんのような生き方については、これはある意味奇跡だったと思います。うちの会社を褒めるわけではないですが、秋信さんがRCCという会社にいたことが奇跡だったんです。本当にうちの会社を褒めるわけではないですが、うちの会社はそれを許す風土があります。私は一取材者として関わっていて、取材者でありながら仕事の合間に小型カメラで撮りためていました。そして、素材ができたところで番組を作っていました。だから何年かに一回番組を作るといやり方を私はとっていました。それをしながら、私も支援の道に結局とズブズブと入っています。それについても会社は許してくれる、あるいは分か

っているけど放任してくれています。

私は今、「きのこ会」の事務局長になっていますが、それは結局秋信さんから「平尾、お前やれ」と言われたからやることになったんです。それについては会社にもちゃんと伝えていますが、何も言われていません。「平尾はずっと原爆小頭症の取材をしている」ということは会社は知っています。でも、何かあるごとに、それをニュースにしよう、ということとは言われません。ただ、私が出したいと思った時に枠を作ってくれるという意味では、私はすごく幸せな会社に入ったと思います。そういう意味では、私がRCCに入れたのも本当にありがたかったです。

もし私がRCCに入っていないかと思ったらこのようなことはできていなかったのかもしれない。秋信さんも幸せな生き方ができたのはあの会社に入ったからだと思いますし、私も今も続けられるのはこの会社に今いるからだというふうに思います。これから先、私や秋信さんのような思いを持つてくれる者がいるかどうかにつきましては、それは「やれ」と言われてやるものではないです。やりたいと思ってくれる人間がいるのであればやってくれればいいなと思っています。ただ、うちの会社はそれを許してくれる会社です。幸せな会社です。

続きまして、秋信さんが「作ってしまった」ということについてです。これについては分かりません。秋信さんは原爆小頭症について私が何度聞こうと思っても答えてくれなかつたんです。ずっと答えてくれなかつた。何かあつたら「大牟田さんに聞け」というふうに振られていました。いろいろあつたのかもしれない。私が、原爆小頭症や「きのこ会」のことについて、支援などの実

務的なことを除いてじっくりと聞いたのは、あのビデオカメラを回していた時、鼻に呼吸器をつけていた時、その時だけです。いろんな話を聞きましたが、まだ私がそこまで思いが至っていないので、『面会室』については聞いていません。なので、それについて答えることはできないです。もしかしたらあるのかもしれないし、そうじゃないのかもしれないですし、それについては分かりません。

そして、原爆小頭症の人のポーターについてですが、実は秋信さんの資料はすべて原爆資料館に収めてあります。あと、大牟田さんのお父さんがお持ちになっていた物は、広島大学の文書館にすべて収められています。すごい膨大な量だったので、私がすべて見られているわけではありません。でも見ていると、当時の事務局の方はいろんな所からデータを集め、取材をしていました。ABCだけだけでなく広島大学でも調査研究はしていたのでそこの原爆小頭症だけでなく、胎内被爆をした人の住所なども入手をされています。調査をした結果として、原爆小頭症だと当時認められたのは後の話でした。

秋信さんが原爆小頭症の方々、胎内被爆小頭症の方を見つけたのが一九六五年で、国に認定されたのは一九六七年でした。一度に全員が認められたわけではなく、少しずつ認められたのです。そして今に至っています。秋信さんたちがポーターを引いたわけではなく、胎内被爆をして苦しんでいる人たちで、集まれる人はとにかく集まりましょうと声をかけたんです。そして集まり、一緒に行動しましょうと思つた方々について、さらに医学的な調査をしたり、厚生労働省に対して一緒に行動したりして認定を受け

たという流れです。秋信さん、大牟田さん、文沢さんという事務局の方々は胎内被爆をされた方々のご家族の立場に立つて活動されたんだと思います。その原爆小頭症の線を引いたのは彼らではなく、国です。基本的に、一緒に行動された方については、皆さん全員小頭症の認定は受けられています。

山本 では、他にどなたか。

中野和典 一つ情報提供と質問があります。栗原貞子が一九七九年に書いた詩があります。「アメリカよ自ら滅びるな」というすごい題名の詩です。その中に「今も爆弾の余韻は消え去らず／ピルラッシュの街の片隅に／放射能患者や／ケロイドをひたかくしにした被爆者が／うすい影のように生き／二世 三世が 突然白血病で亡くなり／三十一才になった小頭症患者が／幼児のような片言で話して／年老いた親たちを悲しませている」とあります。

この「三十一才になった小頭症患者が」という記述はいつたいどこから出たのだろうか、ということを考えています。というのは、先ほどの映像の中で繰り返されていたのが、誕生日の光景でした。成人式の場面があり「五十才になった」「七十才になった」という形ですと反復されていました。このドキュメンタリーに出てくる小頭症患者とのお父さんがいますね。そのお父さんが「わしより先に死んでくれたほうがええと思う」ということを言っています。お嬢さんだけが生き残って、どんどんお嬢さんの家がゴミ屋敷のようになっていきます。誕生会では綺麗な格好をしているんですが、特に、ゴミ屋敷のようところで暮らしているのを見ると何ともやりきれなくなります。

私個人は原爆小頭症の方というのをあまり意識していませんで

した。今回、言われて確かに『この世界の片隅で』に書かれていたなと読み返して思い出したくらいです。何でそうなっているのかというの、時代によったり、情報の制限などもあったりするのだと思います。たぶんもう一つ考える必要があるのは、これは飛躍しているのかもしれませんが、胎内被爆というときに、私たちが連想するのは、ひよつとしたら『夢千代日記』なんじゃないかと思うんです。NHKで一九八一年に作られた吉永小百合主演のあのテレビドラマです。主人公が「わたしの病気は白血病です。……三十五年前、広島でピカドンの光をあびたせいです。でも、わたしはピカドンの光を見ていません。……母の胎内にいたのです」という語りとともに「原爆の閃光」が繰り返し描かれています。胎内被爆という言葉のイメージの中にドラマ等の強い影響もあつて小頭症よりも白血病というイメージの偏りがあるのかな、と感じました。この件についてどういうふうに思われるでしょうか。あるいは、栗原貞子が七九年に「三十一才になった小頭症患者が」と書いたのですが、どうしてこう書いたのか、ということがもし分かったら教えていただきたいです。

山本 何か意見のある方はいらっしゃいますか。

平尾 すみません。本筋からは離れるのかもしれませんが、「きのこ会」の人間として話をさせていただいてもよろしいでしょうか。原爆小頭症の家族の方というのは、遺伝ということについてはごくナーバスになっておられます。というのは、特に兄弟の方々や、被爆二世に当たる方は、自分の姉や兄は胎内被爆、直接被爆をしたから障害があるんだ。これは別に遺伝ではない。原爆放射線を、これから細胞分裂が活発になる妊娠三カ月くらいの本当

にまだ人間の形にもなっていないような時に、強力な放射線を浴びたから、こういう障害がある。そう、すごく強く思っています。なので「兄弟たちにとつてはそれによつて、「小頭症の子がいるような家の子とは結婚するな」と、矢のように何度も何度も言われてきました。「あそここの家の子は弱いから、就職させると後が大変よ」と言われて就職させてもらえないこともありました。二世、三世というところの差、区別ということをしつかりと線を引いているというのが、「きのこ会」としての思いです。

実際、私の家内は二世ですし、娘は三世になります。そこでどうこうということは、私は事務局の人間でありながら、そんなことは一切思いません。ただ、原爆小頭症の方については胎児の時に被爆をした。そういう方々だから障害を持っている。胎内被爆の方で障害のない方ももちろんいらっしゃいます。実は「きのこ会」の支援者で胎内被爆をされた方もいらっしゃいます。同じ胎内被爆者で、同級生だという思いで支援をされている。彼らの思いとしては、言い方が善いか悪いかは分かりませんが、「運の良さ、悪さ」みたいなところで、この方がたは障害があったけど自分はなかった。それだけ、と言われていたりします。

栗原貞子さんの話とはちよつと違いますが、「きのこ会」としては二世、三世と胎内被爆というのは違う物だと、明確に方針として思っています。

松本滋恵 栗原貞子博士論文に書きました。「きのこ会」の会員になつていのは事実なんです、そこまで論じるとたくさん資料になるので、博士論文では少しは研究しました。女学院大学の栗原貞子記念平和文庫の中に、「きのこ会」というファイル

があります。それで会員になつていのがわかります。その時に得た資料などがファイルの中に保存されています。それで、「きのこ会」の詩ができたこと認識しております。それはちよつとしか調べませんでしたし、論文にもそこまで取り上げませんでした。栗原貞子は「きのこ会」に入つていたことは資料から分かります。以上です。

山本 情報提供をありがとうございます。他に、いかがですか。
西河内晴泰 私は、秋信さんの取材対象であつた被爆二世の会の者でした。七六年に東京都議会で、近藤都議が差別発言をした時に、東京被爆二世の会の役員をやつていました。その時に取材を受けて以来のお付き合いです。その後、関東被爆二世連絡協議会を結成した時も、取材に来られていましたし、厚生省との交渉の時も同行取材は秋信さんただ一人でした。マスコミの同行取材は、いつも秋信さんが一緒にいました。私たちは活動の内実を秋信さんにはさらけ出していました。私たちも運動を素人で始めたものですから、活動はうまくできてなかつたです。そもそも原水禁運動とか、反核運動とは一線を画している部分もありましたから。私たちが強調してきたのは、被爆二世、三世に対する差別、それとの闘いだつたんです。特に、マスコミがそういう差別、偏見を助長し、あおり立てたという立場をとつていました。結構私たちはマスコミに対して否定的、あるいは糾弾をするという姿勢を持つてきました。

秋信さんは、自らが、報道によつて侵害される人権を守るといふ姿勢を、日本で最初に明確に示したジャーナリストだと私たちは位置づけています。ですから秋信さんとの接触や取材はオーブ

ンにしてみました。共に闘える相手だと思ってきました。最後は常務取締役として経営に参加されてしつかりとした方だったとこちらは評価しています。被爆者や被爆二世に対する様々な問題を私も大学でしゃべっています。その中で、秋信さんの営為は、大きいものだとすることは、時々取り上げてお話をしています。

山本

情報提供をありがとうございます。

川本隆史（以下、川本） 小頭症については、広島の家生の近所に当事者の方がいらして、「家から出してもらえんかったんじや」という実情を間接的にうかがったことがあります。かなり経ってからの話ですけど。その後、東さんたちが始めた第一回ヒロシマ平和映画祭で日本初公開されたステイヴン・オカザキ監督作品『マッシュルーム・クラブ』を観て、新たな関心をかき立てられました。その映画にずっと気になっているシーンがあるので、平尾さんにお尋ねします。

島中百合子さん親子のご自宅で、夕飯時に、テレビでは時代劇が流れています。そこでお父さんが淡々と語られます。その時になぜか『人間革命』の背表紙が無意味に長く映されます。これは勘ぐれば、島中さんが映像化するに当たって「必ず池田先生の本を撮れ」というように取引されたんだろうと。それは勘ぐりではないのですが。そういう、お父さんを支えていた創価学会の信仰、もしくは学会員のサポートがあったようなのです。今日のドキュメンタリーを見ていて、「帰りたい」と叫んでいらした娘さんのお母様が「信仰に身を委ねた」という表現がありました。信仰というのはやっぱり創価学会なのかなと思ったり。

平尾 違います。

川本 あ、違うのですね。いずれにしても、「ぎの公会」というのはまず自助グループであり、支援者が原則を守って続けてこられたことには本当に敬意を表するのですが、そういう支援や自助とは別のところで、例えば島中親子とか、高橋さんのお母さんは、信仰にどう支えられていたのか。それはもう運動の届かないスピリチュアルな領域として割り切れないのか。あるいは支援の運動の力不足が宗教団体のほうにお父様やお母様が身を委ねざるを得なくさせる。支援態勢の問題として考えないといけないのか。それともたまたま、学会のネットワークが機能したからということなのか。もしご存じのことがあれば教えてください。

大牟田 父親が書き残した記録を見たりなんかすると、兄弟などに対する差別が大きいという事例などもあります。もう一つあったのは、各世帯みなさん本当に貧しさが徹底しているという状況にありました。そこに関して、とりあえず「ぎの公会」の目的としては、まず国に胎内被爆を認めさせて、医療の分野でも手当てを出してもらうことが第一である。その背景にある貧しさまでには、手は届かないです。そこまでいってしまつと、ちょっと意味が違ってしまふ。いろんなことを考えていた時期があった、例えば、ある施設を建てて、「ぎの公会」のメンバー、当事者の方々が、みんなで生活するようになったら経済的にもずいぶん助けられるのではないか。そのようないろんなアイデアが出されましたが、結局、最終的に親父が書き残しているのは、「十人十色」だと。一つ一つ全部ケースが違う。それを一つの形で、というのは難しいので、枠にはめるのではなく、助けられるところがあれば助けるけども、ダメなところはダメということもある、とい

う中でやっていたことは、私もチラチラと聞いた記憶があります。

平尾 畠中さんは何度もご自宅に行かせていただいたて、取材もさせていただきましたけども、そういう宗教的なことを言われることは一切ありませんでした。だからそれは、取材者、編集者が何かの思いを持って出しただけだというように思います。畠中さんはそういう人ではありません。お母さんが亡くなられているので、お仏壇の前に手を合わせているところを撮らせてくださいというように言ったところ、「ちよつとそれは見せるものではないんだけども」という感じで言われている方でした。だから確かに、強い信仰心はお持ちでした。

しかしそちらのほうでアピールしようという方であったとは、お亡くなりになるまで、私は一切感じたことはありませんでした。先ほど大牟田さんが言われていましたが、多くの方とかほとんどの方が貧しいんです。やはり。そういう中ですがるところであつたことは否めないでしょう。別にそこどうこうということはありません。

川本 すみません。差し支えなければ、「面会室」のなかで「帰りたい」と言っていた娘さんのお母さんが入信されたのはどうい

う？
平尾 神道系です。ちなみに、「きのこ会」が設立された時、番組の中でも言いましたが、柱としては三つありました。「この子の障害が原爆によるものと認めさせよう」というのが柱の一つです。二つ目が、「この子がちゃんと生きていけるように終身保障を国に求める」。三つ目が「核兵器の廃絶」。これらが「きのこ会」の目的です。ご家族、親御さんたちはその目的ですつと会を進め

ていくという感じですか。

山本 ありがとうございます。他には？

坂口 この作品を見たときに、「奇跡」という言葉は僕、大嫌い。また、高野さんは使わなかつたけれども「天才だからできたんだ」という。そういう発想というのは僕の中にはないんです。天才と言つてしまえば、僕と地続きのない世界に行つてしまうから。おそらく、地続きのところで考えないといけないというのを、僕は記録文学や記録作品を考えた時に思います。ドキュメンタリーでつまらないのはどんな要素だろうと考えるんです。商品としては売れていても、全然つまらない作品もあります。それはどこが原因なのかと、ずつと今考えています。僕の中に一つあるのは、途中に映画がありましたね。「社会を変えよう」とか、「政治を変えよう」とか。僕はもう一つ大事なことは、「自分も変わっていくんだ」ということです。記録文学で面白くない作品というのは、「自分は高みにいて、大衆を見下ろしている」という、自分と縁続きでない作品というのは全然つまらないのです。やつぱり自分もその中で変わっていく作品というのが文学として成立していくんだなと。

同じことをこの映像を見ていて思いました。やはり皆さんも、関わるることによって社会を少しでも良くしよう。同時に、自分も変わっていく、そこが面白いんだろうなと。そういう意味で、僕は高野さんの「奇跡的」という概念を断固拒否します。

高野 僕は秋信さんの才能をまるで「天才」のごとく、「奇跡的」と呼んだわけでは決してなく、あの方の番組制作スタイルを許した当時の状況そのものを「奇跡的」と呼んだだけです。誤解しな

いってください。

川口隆行 実はその記録の話や、記録を作品化する話については僕も同じようなことを考えています。この研究会は「文学」を名乗っていますが、最初から歴史学や歴史の研究を排除しませんでした。そもそも文学というものに、今日のテレビドキュメンタリーなども入れながらやってきたわけです。じゃあ、なんで歴史学とか歴史的な研究をむしろ好んでやってきたことの意味がなんとなく僕の中でクリアになってきたと感じます。一方で、記録か作品かというところで、ある種の跳躍がある。そこをどう詰めて考えていくのかということ。被爆資料を残していくことと、まだ作られていない作品のために資料を残すこと。何が作られていないか、あるいは書かれていないか、ということ自体をこの研究会が問うことが、もしかしたらこの場の目的のかなと。論文で書く人もいれば、創作する人もいるわけですが。

そして、平尾さんに質問が集中していましたが、東さんにもつと聞いてみたかったことがあります。顔の話がとも面白かったんですが、僕も『この世界の片隅に』のあの顔が気持ち悪くて仕方なかったです。そういう顔の話もつこみたいのですが、さっきの記録の話と、作品化していく時にポエジーがあると。まさにそれがさっき東さんが言っていた「自分を問い直す」とか、ポエジーとかエモーショナルなことがあるから、自分自身の存在というものをまた問い返すきっかけになるんだろなと考えます。でもポエジーとか、エモーショナルなものは、ある種の危険性があり、どっちに転ぶか分からない。もしかしたら見る者を誘惑していく力にもなります。また、誘惑があるから変えていけるんだ

とも思うのですか。

簡単に言えば、ポエジーの質の問題をどう考えていいのかを僕は悩んでいます。はつきりと言語ができないのだけど、ポエジーはあるけど、たちの悪い作品とか、その辺をどのように考えた方がいいのか、もし意見があればお聞かせください。

東 難しい質問ですね。まず具体的に平尾さんの作品で言えば、今日改めてこの場で見て、「なんだジョンナス・メカスじゃん」と思ったんです。アメリカの映像作家のメカスです。それを平尾さんの先ほどの説明の中でも、内輪のことを描くから非常に難しいという話が出ていました。やっぱりメカスじゃんと思いました。ある種の親密性みたいな話とか公共性の話に関わってるところで、すごく対象とか。今回も僕は慎重になりたいのは、「資料」という言葉も「作品」という言葉も「対象」という言葉もなるべく使いたくないと思っています。というのは、幸いなことに僕は大学の研究者じゃないのでフラフラとしていられるのでそういう言葉遣いを拒否することができるということもあるのかもしれない。そういう意味ではすごくその辺の距離感みたいなものがポエジーを発生させるのかなというのが一つの仮説です。

もう一つ、ポエジーまがいのドキュメンタリーという話があります。ちょうど今日も持ってきたんですが、『ゲームチェンジング・ドキュメンタリズム』という本があります。結構面白い本なんですが、危険性もすごく感じさせてくれるドキュメンタリーの世界的な動きが伝わります。書き手の人たちも、すごく誠意にあふれて、すごく知識があつて若々しくて素晴らしいなと思う反面、「ん？」という部分もすごくある。

取り上げられてる作品も、テレビでも放映されるし映画館でも上映される。そしてアートなんだがドキュメンタリーでもあり、どちらかよく分からない作品など、いろんな作品があります。どれも確かに、ある意味で枠にはまった美的、という意味でのポエジー。今話題として居るのは、たぶんそうではない、何か違うポエジーみたいなのは何に感じるのかということですが、一つの仮説が、「平尾直政は、実は広島島の原爆に関わるジオナス・メカスだったんだ」と言ってしまう楽にも書けるなど気づきました。でもやっぱりそれじゃちょっと違うし、という話ですね。しかし、ヒントの一つとしては、「対象」と言ってしまうない、作品と違ってしまわないという微妙なニュアンスの立ち位置がゆれるなかで出てくるものを感じるのかなと、今日思いました。答えになつたかわかりませんがすぐに出る話でもないですが、今日はそんな風感じました。

山本 ありがとうございます。では、柳瀬さん。

柳瀬善治 柳瀬でございます。さきほどの川口さんと東さんのお話にあった「ポエジー」について質問させていただけます。まず、「人の顔を見る」という話題に関わりますが、これはレイイナスなどが言う、「人の顔を見ると殺せない」というある種の「倫理性」の問題ですね。これは、さきほど東さんが言われた「エモーショナルなもの」がそのレイイナス的な「顔を見ることの倫理性」の重要さと関係してくるのではないかと思います。と申しますのは、最近のアニメは、事物の描写はすごく細かいけどそうしたエモーショナルな「顔」が描けないのではないかと思ってるのですが、それはそうしたアニメーションの表現と受容双方で「倫

理性」が希薄になっていくこととどこかで関係しているのではないかなという気がします。

この「顔」の問題と関わらせて考えれば、ある種の良質なドキュメンタリー内で、人々の間で、つまり作り手と取材される側の関係性の中で出てくる「沈黙」をどう捉えるかですね。と言いますのは、要するに、アニメーションの中では、声優さんの演技が必要とされることも関係しますが、「沈黙」の「重み」というのがなかなか表現できない。声優さんは映像を前に沈黙するわけにはいかないですからね。先ほどから話題になっている「ポエジー」を感じる「エモーショナルな関係性」というのは、どこか、ある種の「倫理性」や「沈黙」みたいなものと結びついたらうえて出てくるものなのだろうと思います。

あと、京アニの事件の話の後に相模原の施設での殺人のお話をされましたが、京アニの例の事件が報道される時に、「犠牲になった方々がすごく才能のある人たちで残念だ」みたいなことが凄く言われたのですが、このような発言にすごく違和感を感じるのは、つまり「生産性」や「有用性」で人間を弁別して切り捨てているということへの違和感ですね、それをものすごく感じるわけです。そうした発想の中で、たとえば相模原の事件のことがほとんどん片隅へ追いやられていく。今日の「きのこ会」の話に関連させて申しますと、これは「有用性」とか「生産性」と外れたところにいる人たちの記録なわけです。そういう人たちのいわば「単独性」、その（沈黙も含んだ）重さ」みたいなものを表現していくのが良質なドキュメントであり、記録なのではないかと思うわけです。

この二つの話題をどうつなげていいかはちょっと分からないんですが、あまり「生産性」や「有用性」のことばかりをとらえるのは、結局、そうした考えは、才能のない人や無用な人を切り捨てる言説の反転物でしかないことですね。今、こういう「きのこ会」みたいなものを評価する時に、今お話ししたような「沈黙」「顔」という観点から、もう一回見直してみることが必要なのではないかと思えます。

東さん、この点について何かお考えがあったらお答えいただければと思います。

東 広島に帰ってきて広島のことを書いていた時に、今日もそんなんですが、顔と言葉のなざに会ってしまっただけというのはいさぐく大きいです。このところ続いていることについては、全体的な治安がどうだという話ではなく、あまりに攻撃的なことが起きてきていると。先日もLGBTに関してのドキュメンタリーを見たら、フェミニストやジェンダー関係の人は一切出てこない。そして、経済的有用性や労務問題はかりに集中している。だから結局渋谷区長の言っている、「優秀な人がLGBTの中にもいる」というような話になっている。それは本来人との関係性の中では関係のないことです。そういう地点に今いる。広島で何かを考えるということとは、徹底的にそういう有用性や強さから離れていくことでないといけないはず。だけど、胎内被爆者を制度的にきちんと認めさせるところからスタートするという話だったりしました。

広島はどうしても国際政治の中で核兵器を凍結していくみたいな話になってくる。でもいちばんのスタートラインは原民喜の「人

間」みたいな話にどうもう一度帰るかということに立ち返らなければいけない、とは今日感じました。

大牟田 付け加えるわけではないんですが、『河』について、私も原稿用紙一〇枚くらい執筆しました。そこにも書いたんですが、この「きのこ会」の話はさかのぼっていくと、実は戦後の「原子雲の下で」、「原爆に生きて」という手記について、前回の福岡であつた研究会で宇野田さんとかキアラ・コマストリさんが解説されたことがあります。峠三吉とか山代巴が被爆者の声を直接訪ねていって、その生活の中に入っていくって顔を見ながら聞く、それを手記にしていく、という活動をしていたんです。その後、峠三吉は亡くなりました。そこに川手健という若手の活動家が入ってまた手記を作ろうと動いた。その川手健と大学時代に同じ部屋で起居を共にしていたのがうちの父だった。川手健は三〇歳で運動に絶望して、あるいは個人的な事情もあって命を絶つてしまう。山代巴はその五年後に、うちの父とか、秋信さんとかと集まって川手健を知る人間で何かできないか、という話をした。そんな中で広島研究会というのが生まれた。その広島研究会の会で、「じやあ本をたそうよ」となって、『この世界の片隅で』が生まれた。そんな風にならずと連なっています。一九六〇年代、特に六三年は原水爆禁止運動に関する分裂があり、イデオロギーに非常に振り回されていた時代でした。そんな中で、被爆者の一人一人の顔を見ながら証言を聞いていこうというところから生まれたのがこの本でした。そこから「きのこ会」が生まれた。でもそれはイデオロギーじゃないんだと。一人一人の家族と向き合いながら当事者がどう生きやすくするかということをやっていくと。それが今

につながっています。

そんなことを考えると、戦後の顔の見えないスローガンに徹してしまふようなそういった平和運動と違う形でのその動きが確かにあった。それが、現在にまでつながっている細い細いつながりかもしれません。そんなことの積み重ねなのかなということをも最近考えています。

山本 ありがとうございます。確かに、「きの公会」事務局の源流が、五〇年代にあるというのは、司会の方が言わなければいけなかったですね。あとお一人くらい発言が可能かと思えます。では、東村さんお願いします。

東村岳史 ちよつと型にはまった質問になるかもしれませんが二つあります。一つ目は、小頭症の人たちは声のない存在として扱われて、なかなか取材の対象にならなかったということでした。それは取材の難しさの問題もあるかと思いますが、こういう人たちを扱う場合は、代弁ができるのかどうかという問題がつきまわってくるんじゃないかと思えます。親御さんたちが生きている間は親御さんたちに意思確認ができると思うんですが、その方たちも亡くなってしまった後に、ご自身だけだとうなるのか。例えば、取材を申し込んで、この取材の意味をどういう風に分かっているのかなという、そういう難しさがあります。また、勝手な推測なのですが、秋信さんがその辺を禁欲されていたのは、意思確認とか取材の難しさを意識していらしたからではないかなと思います。その辺について何かお考えがあればおたずねしたいです。

二つ目は、東さんが言われていた「型にはまる」ということで

す。原爆ものとか、被爆者を扱ったドキュメンタリーが型にはまるというのは、そういうこと言っている研究者もいるし、そういう傾向もどこかにあるのかもしれない。この番組を作られた時に、既存の番組には型にはまっているということを意識して作られたのか。それとも、作ってみると結果的にこういう作品になったのか。もし何かありましたらお聞きしたいです。

平尾 原爆小頭症の方々、本当に、今取材をしようと思うと、大変です。彼女たち、彼らたちの半生のことについて聞くこと思っても、聞くことができないからだと思います。実際、そういう風に「きの公会」に連絡をいただきませう。そして引き合わせたりするので、基本的には事前に私のほうから取材者に対して、レクチャーします。これはRCCで取材した者ではなくて、「きの公会」の人間として私が持っているもので伝えられる情報についてはその取材者に私のほうから事前に説明をします。そして場合によってはその取材に立ち会います。

そういう風にしてできるだけ、取材を本人が受けるというものについては伝えてもらえるように対応をしています。放送局の人間としては、「なに、よその会社の世話をしよるんや」という話になります。でもそうしています。実際「きの公会」として原爆小頭症というのは伝えないと、ないことになってしまう。いまいことなってしまう。これは本当にいちゃばん問題なんだと思います。実際、今年のエピソードとしては、二四年ぶりに新しく会員が増えました。「きの公会」に在籍している方以外に、厚生労働省のほうから何々県に何名いますというの発表されていますので、その行方の分からない方々の都道府県の担当課の職員の方

方に、事前に電話をし、お願いをしました。「きのこ会」の資料を送って、もしよろしければ小頭症の方に転送してもらえませんかというアクションを起こしたのです。一つの家族から返事がきて、実際に「きのこ会」として会いにいった、その方が仲間になってくださったんです。その方は神奈川県の方ですが、原爆小頭症のことについて何も情報が本人に行っていないませんでした。

原爆小頭症の人間が神奈川県に一人だけだという情報も持ってなかつたです、全国にこういう会があつてこういう活動をしているということすら知りませんでした。このことを、つい先月の「きのこ会」の総会で会員の皆さんに紹介しました。その取材をしていた新聞社の記者の方に言われたのは「これまでRCCさんとかが、原爆小頭症の方をいろいろ放送されたり、伝えられていたんですが、伝わっていないところがあるんですね」ということでした。「いや、本当にそうですね」と返しました。これはある意味反省に近いかたちで思いました。

やはりRCCだけが頑張るのではなくて、新聞も出版も講演も、とにかくいろんな形で「原爆小頭症の人たちが今世の中にいるんだよ、いたんだよ」ということをしっかりと伝えていかないと、放射線の影響が胎児にも及ぶんだという事実がないことになっていってしまう。これについては、できるだけ一人でも多くの方々に知っていただきたいと思えます。そういう意味で「きのこ会」のスタッフとしてできるだけご本人たちのプライバシーや思いを最大限汲みながらも、伝えていくことはやっていきたい。あわせて記録も、会として残していきたいし、伝えていってほしいと思います。ぜひ皆さんの中でこれについて研究されたい

という方がいらつしゃれば、ご連絡いただければ一生懸命サポートさせていただきますと思います。

また、「型にはまつた」ということに関しては、考えたことはないです。それこそ本当に、自分がどう表現するかというのは、その度、その度にいろいろ考えたりします。ちよつと論点は違ってもいいかもしれませんが、実は番組の中に出てきたRCCのアナウンサーの松永さんというのは実は私のドキュメンタリー作りの先生、師匠に当たる人です。そういう意味で本当に超内輪で作っている番組なんです。その松永さんから教えてもらったことに、「泣いている時に涙に寄るな。涙は記号じゃない。泣いたからって顔に寄るな」ということがあります。震える肩であつたりとか、背中であつたりとか、全身で表現できるものがあるだろう。それで伝えるというのが本当で、言葉だけじゃない、映像を記号化するんじゃないという風に言われました。

実はそういうところも含めて昭和天皇の会見のシーン、あそこについては一連ノカットで出しました。一切手は加えてません。もちろん秋信さんの場所が分かるように影を付けたりはしましたが、秋信さんの質問も全部切らずに、広島に行幸から始まって、という風なところも含めて出しました。それを受けて、裕仁天皇が普通に座つてたのを、ちよつとこういう風に席を変えていって、その横で皇后が「？」という顔をしながら、言葉も選びながら、「え〜」というのを何度も何度も繰り返してというの、あれは一生懸命いろいろなことを考えられた上での答えなんだろうなという風に思いました。あの証言について番組の中では触れていませんが、秋信さんについてはしっかりと、正直に答えてもらった

という風に評価をされていました。内容がどうこうというのはともかくとして、あの立場でしっかりと答えてもらったという風に言われていました。「それについて評価するのはジャーナリストの仕事ではない。見た者が判断を下すものだ」という風に、秋信さんは言われていました。そういう意味で、尺の都合はあるので切らなくちゃいけないところもあるんですが、出すところはかたまりで出しました。そして、何かあったからすぐに寄つてとかじゃなくて、全体の空気感を出すというのは、僕の番組の中ではちよつと意識はして作っているところではありました。

山本 ありがとうございます。またまだいろいろ論点はあろうかと存じますが、今日はいったんここで締めさせていたいただきたいと思えます。多様な論点が提出されました。作品の背景や制作者の意図が明らかになったことは、もちろん収穫ですが、それだけではなく、テレビ・ドキュメンタリーという記録・表現を通して、原爆を考えていく場合に、他のメディアとは何がどう違うのか、どういう点に留意するのが良いのか、という点について特に深めることができたように思います。準備段階からいろいろお助けいただいた平尾さん、大牟田さん、東さん、そして会場のみなさま、本当にありがとうございます。

(二〇一九年七月二七日)

【付記】この小特集の企画・準備について、科研費(18K18530)の助成を受けた。